

## 内山秀夫君学位請求論文審査報告

内山秀夫君がこの度博士学位請求論文として提出した論文題目は、「比較政治の方法に関する研究」であり、それに関する主論文として『比較政治考』（一九九〇年）、副論文として『政治と政治学のあいだ』（一九九八年）が提出されている。ここでは論文題目の「比較政治の方法に関する研究」の主題と論者の比較政治論の絶えざる展開の試みに照らして主論文の『比較政治考』を中心にしつつも、副論文にも言及して審査報告することにした。

### (一) 論文構成

内山秀夫君による主論文『比較政治考』は大部なもので全部で一八章からなり、その具体的な論文構成は以下の通りである。

- I 現代政治学の成立と展開
- II 政治的近代化の理論と問題

- III 政治発展の概念とその分析方法
- IV 政治文化概念の成立と展開
- V 政治文化と政治変動
- VI 政治における発展と統合
- VII 現代政治学における比較研究の展開
- VIII 政治体系分類論と発展弁証法
- IX 社会主義体制の比較研究―方法論的序説―
- X 参加民主主義論序説
- XI 参加と動員の政治動学
- XII 政治参加と現代政治学
- XIII 戦後世界の組み替え―一つの試論―
- XIV 国家と民主主義の現在
- XV 開発と民主主義は両立可能か

XVI 政治社会の構造化—インタレスト社会からニーズ社会へ—

XVII 文化政治論への構想

XVIII 民族再考—エスニシテイの政治学序説—

また、副論文『政治と政治学のあいだ』の論文構成は次の通りである。

沖繩の友への手紙—「まえがき」に代えて—

1 章 政治学の方向

2 章 政治文化—システムと人間をつなぐもの—

3 章 政治学における科学と価値

4 章 高齢化社会の政治とデモクラシー—その可能性について—

5 章 ネガティブパラダイムとしての政治学—一つの政治学論—

6 章 現代世界と政治理論

7 章 幻影よ、さらば

8 章 政治—人間の人的利用のために—

9 章 国家民主主義から生命民主主義へ

理論と現代史のはざまに立って—「あとがき」に代えて—

## (二) 本論文の内容要旨

主論文の『比較政治考』は全一八章、副論文の『政治と政治学のあいだ』は九章に及んでいるが、ここでは逐次章を追って内容要旨を検討していく報告はせずに、本博士論文の論者が題目として掲げている「比較政治の方法に関する研究」という問題設定とそれに対する論者の考究を中心にしてみていきたい。

本論文に一貫して貫かれている研究姿勢は、「比較研究」「比較政治」にこだわり続ける姿勢である。何故にこれほどまでに「比較研究」「比較政治」にこだわり続けるのであろうか。「比較研究はまさに政治学そのものである。」「その持続のためには、比較研究は政治学に養分と刺激をつねに送りこむことを必要とする。それは政治学がつねにみずから自己否定するだけの強靱性をもたなければならぬことを意味している。それを端的に表明したのが運動としての《行動科学以後の革命》でなくてなんであろう」(『比較政治考』(以後『考』と省略)、一二二頁)。戦後日本においてもっとも活動的な現代政治学者のひとりとして果敢に論陣を張り現代政治学の地平を切り開いてきた論者の基本的な問題意識と研究姿勢が如実にそこに示されている。

る。ここでは、大きく(Ⅰ)現代政治学の成立と展開、(Ⅱ)現代政治学における比較研究の展開、(Ⅲ)現代政治学の新たな模索と方向 に分けて内容要旨をみていくことにする。

# (Ⅰ) 現代政治学の成立と展開

『比較政治考』の前編はこの研究課題にあてられている。制度論や機構論を中心に発展してきた伝統的な政治学が、第二次世界大戦終戦後にアメリカにおいて「人間の行動」を基軸にした新しい社会科学としての行動科学に集約していくなかで、政治学が政治行動論として出発していく動きをまず述べている。それは、やがて一九五〇年代、一九六〇年代において、D・イーストンの言葉をかりれば、政治行動論から行動科学的政治学へ——political behaviorism から political behavioralism へ——と方法的・認識論的に着実に発展していった。論者は、この文脈で行動科学的政治学が、R・A・ダールのいう「行動科学革命」の内容を深め、D・イーストン、G・A・アーモンド、D・E・アプターなどによる分析概念の推敲過程を経て、政治的パーソナリティ論、政治的コミュニケーション論、投票行動論、政治参加論などに加えて、政治過程論、政治集団論、政治システム論、政治発展論などに対象領域を拡大深

化させつつ、新たな「科学方法論」に依拠して、現代政治学が成立し展開していく動きを考察している。こうした現代政治学の動向と軌跡は、現代社会学におけるT・パソンスなどに代表された行為の一般理論化や構造Ⅱ機能主義、システム理論の展開などの軌跡とも交錯するものであった。

論者は、一九六〇年代中頃の初出論文である「政治的近代化の理論と問題」(『考』第二章)においても既に示唆していたように、故キング牧師らによる黒人の公民権運動、「第三世界」の歴史的経験、グローバルな少数民族問題などの新たな人間世界の拡大と挑戦の動きに照らして、「行動科学革命がまだ完了しない中に」「行動科学以後の革命」(D・イーストン)を嗅ぎ分けている。論者は、一九七〇年代前後に著書『政治発展の理論と構造』(一九七二年)のなかで、「この状況での行動科学的政治学が、いずれは対決しなければならない問題として、(一)価値の問題、(二)歴史の問題、(三)量化の問題、(四)経験的政治研究と一般理論への統一の問題、(五)経験的政治学と思索の問題」をいち早く指摘していた。従って、従来の「比較政治機構論」の領域を中心とした比較政治論にみられる狭い経験的基盤と限定された理論構成過程の制約、更に行動科学的政治学、行動科学以後の革命の動向とその批判的考察を軸にして、論者

の歴史における人間世界の拡大と挑戦にともなう政治現象の把握に相応しい分析概念の探究と理論構築の試みが展開されていく。

『比較政治考』の第二章の近代化と政治的近代化の概念、政治的近代化理論の諸問題、第三章の政治発展と制度化論、政治変動と政治体制、第四章の「政治文化概念の成立と展開」、第五章の政治文化と政治変動、第六章の歴史としての発展と統合、政治における秩序と変動の論究は、論者が現代政治学の動向のなかで多くの現代政治学者による分析概念や理論展開を参照しつつ、政治は紛れもなく「人間のいとなみ」であり、「政治とは、社会的価値と配分、およびそれをめぐる紛争とその解決のプロセス」であるという政治理論の基礎に立って、現代という革命的な歴史状況のもとで変動と秩序化が交錯し続ける「政治における理念と制度の緊張関係」(一八四—一八五頁)を理論的に考察しているところである。

## (II) 現代政治学における比較研究の展開

『比較政治考』の中編ではこの比較研究の問題が特に集中して扱われている。第七章「現代政治学における比較研究の展開」において論者は、現代政治学の行動科学以後の革命のなかでも中心的な論点とされる、C・E・ブラック、

S・N・アイゼンシュタットなどの政治的近代化論、L・W・パイ、カール・フォン・ヴォリスなどの政治発展論、更に政治変動論と政治文化論を跡づけながら、「歴史としての現代」における政治現象、政治状況を理論化する作業に集中していく。「政治変動は、政治体系が何らかの新しい能力を獲得することである」とするアーモンドの姿勢を受けて、論者は、政治文化と政治発展との関連を重視し、政治文化は、第一に個人にたいする有効な政治行動コントロールのガイドラインとなり、第二に社会的・経済的要因と政治的パフォーマンスとの関連を検討するのに有効な基礎を与え、第三には発展の問題にかんする概念的有効性をもつという観点から(二一九頁)、政治文化と政治変動を関連づけ、歴史としての現代における人間の価値や規範、理念の問題の重要性を指摘する。

人間による「意味のある領域拡大の要求」としての政治、政治体系の何らかの新しい能力獲得過程としての政治変動を考えるならば、従来のような固定した静態的な比較政治学や特定の歴史観、発展論によってこうした変動状況を把握し得ないとして、論者は従来の比較政治学から比較政治研究へのプロセスとして戦後の現代政治学の特性づけを展開し、比較政治論は政治学そのものであるという論者の基

底的構想を強めていくことになる。

比較政治研究は、政治現象の行動主義的や精緻な分析や行動科学的な分析にとどまることなく、政治は人間のいとなみとして「人間がこれまで確定済みとされてきた価値体系への疑義」を提起するところから展開されるとする。具体的には「第三世界の成立」「新しい国家群の出生」「科学技術の人間生活にあたる革命の変革」などにも明らかにように、既存の価値や規範を新たに問い続け、「比較の方法による自己検証」(一九一頁)を必要とし、「比較政治学は比較政治分析として自己展開をとげなければならない」と指摘する。論者のこうした比較政治研究についての基本的な姿勢から第Ⅷ「政治体系分類論と発展弁証論」、第Ⅸ章「社会主義体制の比較研究―方法論的序説―」が展開されていく。第Ⅷ章は、R・T・ホルト、J・E・ターナー編『比較研究の方法論』を取りあげて主にF・W・リッグスの全政治体系についての体系分類論と発展弁証法を紹介したものであり、第Ⅸ章は社会主義政治体制の比較の問題に関して、社会主義体制の比較分析と(社会主義をも含めて)政治体制の比較分析、全体主義モデルから比較モデルへ、革命社会の比較枠組の問題、体制変動の原型としての権威主義体制などが論じられ、現代という歴史的時点にお

いては〈参加政治〉と〈動員統治〉を軸に広く社会主義体制をも含めて政治体制の比較研究がなされる必要を説いている。

続いて第Ⅹ章「参加民主主義論序説」、第Ⅺ章「参加と動員の政治動学」、第Ⅻ章「政治参加と現代政治学」は、「第三世界に発端した政治変動が自由主義世界に政治変革を突きつけ、さらには社会主義世界においても、イデオロギーの拘束からの離脱志向を一方とし、現代における人間変革の実験としての中国革命を他方として、人間の問題が鮮明になるにつれて、この人間を「市民」と認識する作業が政治学に要請されたのは当然」であるという視点から(三八一頁)、現代における「参加と市民の政治学」を求める論考である。「デモクラシーは人間の生活原理であり、その意味で政治原理である」(三八一頁)という認識を深めていく。第Ⅻ章「戦後世界の組み替え―一つの試論―」においても、戦後日本の民主化の問題をも含めて、国家民主主義を参加民主主義に組み替えるチャンスについて論じている。

分析研究のひとつの手続きであるが、比較はより確実な歴史認識と歴史評価が必要とされ分析によってはつくされないことがらであるとする論者の立場がより鮮明にされ、

人間のかかわる政治的世界の空間的・時間的な比較研究の展開が志向されていくことになる。論者のこの立場は、福沢諭吉のいう「その国の文明を慕うことあらば、よく内外の有様を比較して勉むるところなかるべからず。」「もし一国を全体の一物と視<sup>み</sup>做<sup>な</sup>して他の文明の一国に比較し、数十年の間に行わるる双方の得失を察して互いに加減乗除し、その実際に見<sup>あら</sup>われてるところの損益を論ずることあらば、その誇るところものは決して誇るに足らざるものならん」(『学問のすすめ』)という指摘にも重なるものがある。

### (Ⅲ) 現代政治学の新たな模索と方向

『比較政治考』の後編、そして『政治と政治学のあいだ』(一九九八年)の論考では、現代政治学の新たな模索として、論者によってこれまでの政治学と政治、人間の視点よりも、むしろ人間、生命、人間の生活原理と政治、国家、社会、政治学を問う学問姿勢が一層強められていくと読みとることができる。

『比較政治考』の第XVI章「国家と民主主義の現在」、第XV章「開発と民主主義は両立可能か」、第XVI章「政治社会の構造変化―インタレスト社会からニーズ社会へ」、第XVII章「文化政治論への構想」、そして第XVIII章「民族再考―エスニシテイの政治学序説―」は、いずれも現代政治学にお

いて展開されてきた分析概念や理論を活用しつつも、政治や国家を支える「人間の噴出」、人間の生活原理、人間的ニーズや社会変動が求め意味するところのものに呼応して、現代政治学を再構想していこうとする論者の知的想像力、構想力にあふれた意欲的な論文(いずれも一九八〇年代前半)である。

「未来に対するわれわれの方向喪失感、何よりもまず歴史的な自己認識の喪失、自己の歴史的な所在を知る能力の欠如を示す。……われわれ自身は歴史的空白のなかに行方も知らず漂流しているようである」というR・L・ハイルブローナ(『歴史としての未来』)の言葉を受けて、民主主義の形式的合理化に抗して論者は「人間のトータリテイの回復」、「人間における差異の寛容」、国民国家における「国家と人間の乖離」という根本的な問題領域に立つて戦後世界の政治の方向性を問いかける。

戦後政治を支えてきた国家民主主義論、国民国家論、国民文化論、開発(至上)主義、産業社会論、民族主義論等を批判的に検討して、参加民主主義、人間の存在と生活を優先する現代世界、人間の生存・健康・福祉・自由・人権といった人間の基本ニーズ、多元社会、個別文化の政治的意味、エスニシテイの現在が論じられている。戦後

(統治) 政治を越えて、戦後世界における今後の参加政治の方向性、政治社会の構造変化を思索し模索し続ける論考でもある。

「沖繩の友への手紙―「まえがき」に代えて―」を冒頭に寄せた論文集『政治と政治学のあいだ』は、「海軍軍人を父にもった私たち兄弟」、「太平洋戦争、そして／あるいは十五年戦争に状況追隨による参加をした一員」という戦中・戦後史の論者自らの自分史を語るところから始められ、沖繩、戦後学徒、原爆、在日朝鮮人、アイヌ人、被差別部落、水俣、三里塚、産業社会における人間と価値、技術変化と民主主義、政治の分化、分権とのかかわりなど戦後日本における政治状況に照らして、人間と政治、政治と政治学が論じられる。

そして現代政治学の回転をめぐる、論者は政治学における一方的な科学性の追求、科学的手法への没頭や体制民主主義化の動きを批判して、「現代政治学にとえ一部分であろうとも加担して突っ走ってきたわれわれは、それがはたして人間の生にたいして重大な意味をもったかという点で、伝統的政治学における思惟を否定しうるかと自問しなければならぬのではないだろうか」(『政治と政治学のあいだ』二二―二三頁)と自己省察するとともに、自らが

人間であり続けるための政治と政治学のあり方、「否定の精神としての民主主義」という根源的な問いかけをしている。論者の果てない政治学への学問的な闘いがそこに刻み込まれているといえる。

### (三) 本論文の評価

この二つの論集は、論者が「あとがき」に「政治が何とか少しでもよくなろう、なりたいたいと思うかぎりでの格闘であるかぎり、私は政治学者でありたいと心から思う」(『考』五三三頁)と述べているように、「私の自分史の一部」(五三六頁)ともいえるかもしれない。現代政治学としての論者が戦後政治における国民国家民主主義の進展過程でいち早く現代政治学の動向を切り開きつつも、戦後世界の政治・社会における構造的な変動のもとでの「人間の噴出」、人間による「意味のある領域拡大の要求」、参加民主主義、「否定の精神としての民主主義」などを新たな基軸としてパラダイム転換を求めて、価値をめぐる根源的な問いかけを発想して現代政治学を再構築しようとするひとりの政治学者の格闘の軌跡が本論文には凝縮されている。われわれは、本論文を積極的に評価する点として以下のことを挙げたい。

(1) 論者が『政治発展の理論と構造』（未来社）、『第三世界と現代政治学』（れんが書房新社）、『政治文化と政治変動』（早稲田大学出版部）、『政治学における現代』（三一書房）、『民族の基層』（三嶺書房）、訳書の S・M・リブセツト『政治のなかの人間』（創元新社）、D・E・アブター『近代化の政治学』（未来社）等々にも明らかに膨大な著作・訳書を公刊してきた足跡にも明らかにそのような、戦後日本の政治学界における現代政治学のパイオニア、確かな方向感覚を備えた旗手のひとりとして論者の学問活動と業績は、高く評価されるべきであり、それらは本論文にも凝縮されており、その絶え間ない学問的な営みは後学の徒に示唆するところが大きい。

(2) 本論文のテーマとしている「比較政治の方法に関する研究」にも明らかなように、「比較（政治）研究はまさに政治学そのものになりうる」という鋭い問題意識から現代政治学のなかに従来の比較政治機構論的な比較政治学からより動態的に人間生活原理と市民参加に基礎をおいた政治体系における新しい能力獲得過程としての政治変動という視点から比較政治研究を展開しようとしている試みは、卓越した構想である。

(3) 本論文はいまだ完結したとはいえないと考えるが、現

代政治学を志向しつつも、比較政治研究という視点から歴史的政理論、規範的政理論、経験的政理論など、伝統的な政治学との総合化や科学的政治学の相対化の必要を示唆しているところも興味深い。また、論者は、現代政治学の最前線の知の動向に目を凝らしながら、現代政治学への批判的視点を失わず、現代政治学をより広い社会科学・人文科学の中でとらえ直す試みに果敢に取り組んでいる。論者の挑戦的な知の試みが刻み込められている。

(4) われわれをとりまく歴史的社会的状況、政治状況における新たな問題状況に対して、論者は絶えて倦むことのない鋭敏な感覚、感受性を持ち、そして感受概念を創出していく姿勢にも示唆されるところが多い。

翻って、本論を通じて、強いて気になる諸点を挙げるとすれば、比較政治研究の重要性という問題提起が一貫しているのに対して比較政治研究の方法論的考察がもっと深められてよかつたのではないか、新しい政治状況を切り拓く価値志向性の経験的、歴史的検証や考察についてももう少し言及されるべきではなかったのか、論者の独特の文章表現や用語がユニークであるとともに一般には少々読みとりにくいところもある、などが指摘されるかもしれない。これらはいずれも本論文の展開や主張を少しも損なうもので

はなく、むしろ後学の徒に残された課題でもあると考える。

#### (四) 結論

この度内山秀夫君が提出した博士学位請求論文の審査の結論として、われわれ審査員は、内山秀夫君に博士（法学、慶応義塾大学）の学位を授与することが適当であると判断する。

平成十一年七月十六日

主査 慶應義塾大学法学部教授 川合 隆男

法学研究科委員 社会学博士

副査 慶應義塾大学法学部教授 根岸 毅

法学研究科委員 法学博士

副査 早稲田大学政治経済学部教授 内田 満

政治学研究科委員